

絵本に見る親子関係Ⅱ —親と子どもの絆 父親像を探る—

The Parent-Child Relationship Shown in Picture Books Ⅱ —The Parent-Child Bonds and Father's Image—

桑名 恵子¹

キーワード：父親の存在感、母性神話、とうちゃんのトンネル

1. はじめに

筆者は2007年度千里金蘭大学紀要第4号において、絵本に見る親子関係—スタイグの作品を中心に親と子どもの絆—を発表し、薄れゆく現代の家族の親子関係を松居正の絵本論から検証し、とくにウィリアム・スタイグの作品から親と子どもの絆について論じた。

ウィリアム・スタイグの作品の「ピッツアぼうや」、「ロバのシルベスターと魔法の小石」などでは、親と子どもの絆を描いているが、とくにモチーフになっているのが父親の存在であり、絵本のいたるところに“父親像”が見えた。それは、アメリカという国が育んできた家庭の歴史、文化ともいえるものである。

今年度は、昨年度に引き続き、家族をめぐる問題のなかで、父親と子どもを描いた絵本に注目し、本来「家族」における父親の果たす役割について検証し、家族の有りようを再考する。とくに、わが国では、家庭における父親の存在感の薄さが、問題視される傾向がある。母親の育児負担や育児不安が高まる一方で、育児に疲れた母親による児童虐待なども社会問題となっており、積極的な父親の育児参加が求められている。その現状や背景を探りながら、諸外国の父親像に触れ、本来家庭で果たす父親の役割をさまざまな絵本で検証したい。

2. わが国における父親の変化

2. 1 家父長制度のなかの父親

第2次世界大戦前のわが国では、「家制度」のなかで、直系家族制の家族集団が主流であった。それぞれの家では、父親は一家の大黒柱として、最も存在感があった。経済面も家庭生活の歴史も家父長制度のなかで支えられてきた。そのなごりが「地震・雷・火事・オヤジ」という言葉である。これは怖いものの代表として使われてきた。それほど父親の存在は怖いものだったのである。

確かに、父親は妻や子ども、両親を養うという重要な役割を担っていた。そして、父親は農業、林業、漁業、商工業などの家内労働のリーダーとして、その仕事ぶりを子どもに見せながら、子どもを家業の担い手として育て、仕事を学ばせてきた。職住一致という生活様式が、それを可能としてきたのである。その過程のなかで、子どもたちは、父親の存在に尊敬や憧れをもった。そして、ときには父親から厳しくしつけられたり、注意を受けたりすることもあった。家族の決めごとは必ず、父親が最終決定を下し、とくに、学校進学、就職、結婚の決定などは父親の許しが最優先された。このように、父親とは家族のなかで、最も権威をもち、威厳のある存在となっていた。現在でも、世襲制の歌舞伎の世界などはこのなごりが残っているといえる。

1 Keiko KUWANA 千里金蘭大学生生活科学部児童学科 (受理日：2008年10月1日)

2. 2 近代家族のなかの父親

第2次世界大戦後、わが国の「家制度」は姿を消し、新たに「近代家族」が誕生した。近代家族についての定義について、小学館の「大辞泉」から引用すると、『家族とは、夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、共同生活の単位となる集団。近代家族では、夫婦とその未婚の子からなる核家族が一般的形態』と記されている。¹⁾

近代家族の一般的形態となった核家族化の進行は1960年代から顕著になってくる。都市部においては、都心の近くに賃貸マンションや団地が急増し、そこに入居し、マイホームをもつことが理想とされた。夫婦と子どもだけのマイホームそれが核家族の始まりである。

家族社会学者の落合恵美子²⁾によると、近代家族の特徴として、“①夫婦と子どもからなる核家族であること②夫婦間及び親子間に深い情愛で結ばれていること③この核家族は、地域など他の社会的領域から分離され、絶対視される傾向があることが指摘されている。”の3点があげられている。

核家族という深い家族の絆のなかでは、父親は以前のような権威をふりまわすのではなく、フレンドリーな存在へとかわっていく。家族団らんを大切に、子どもの相談にも耳を傾け、子どもの意見を尊重する。日曜日には、家族そろって遊園地に出かけ、家族サービスも行う。このような父親の姿が街中で、電車のなかで、多く見られるようになった。

2. 3 戦う父親 企業戦士の登場

1968年、わが国の国民総生産 (GMP) が資本主義国家のなかで第2位に達した。終戦直後の復興から続く一連の高度経済成長期の時代である。当時、日本人の勤勉さが世界的に有名になった。社会は経済復興を果たし、人々の暮らしもアメリカやヨーロッパからの影響により、便利で豊かな生活様式になっていった。この高度経済成長期を支えたのは、やはり父親たちの大きな努力の賜物によるものである。そして、多くの父親は、その働き方がまるで戦場で戦う戦士のようにと揶揄されながら、企業戦士と呼ばれるようになっていく。

日々の残業、休日返上など、長い労働時間で企業・会社に縛られ、父親の生活は家庭から職場中心へと移っていった。社会の風潮も「男は仕事、女は家庭を守れ」という性的役割分業の意識が主流になった。父親はますます企業戦士になっていく。

その後、高度経済成長期に続き、バブル景気を生み、わが国の経済はめざましく発展を遂げるが、次第にバブルの崩壊、低成長時代へと移行してくる。現在では、リストラや企業の倒産などが広がるなかで、父親たちは、以前にも増して、余裕のない働き方が目立ち、長時間労働や過労死、非正規雇用など、働く現場は深刻な局面を迎えている。

とくに問題なのが、30代から40代にかけての男性の働く時間が長くなっていることである。働きざかりといわれる世代であるが、バブル崩壊後の不況でリストラが進み、新規採用が抑えられ、仕事が増え、休日も仕事場へ向かう。彼らの働き方はまさに私生活を犠牲にせざるを得ない状況である。

そのうえ、この世代は子育て期の世代でもある。本来ならば、父親がゆとりをもって家庭生活を送り、子育てに参加し、父親としての自覚を高めながら、母親のよきパートナーとして、子育てに参画することが望まれるはずである。

しかし、現状は厳しく、平日の帰宅時間は子どもが寝静まってから、休日は仕事であり、家族と共に過ごす時間がほとんどないのである。この実態を反映し、わが国では、家庭における父親の存在が危ぶまれ、最近では、父親不在が叫ばれるようになってきた。

2. 4 育児を母親に任せる父親

わが国の労働時間は諸外国と比較しても長く、厚生労働省「毎月勤労統計調査」³⁾によれば、1999年の年間総実労働時間が日本では、1942時間であるのに、ドイツでは1525時間、フランスでは1650時間とかなり数値が少ない。1980年の日本の数値は2162時間であり、1980年に比べると、年間総実労働時間は減少傾向にあるとはいえ、日本の長時間労働は、さまざまな現象や問題を生み、男性のライフスタイルのうえでも、見直しが求められている課題である。

男性の労働時間が長いということは、家庭における家事の分担にも影響する。わが国の子育ての実情は、子育てに費やす時間も子どもへの世話（食事の準備・片付け、子どものおむつや排せつの世話、日常のしつけ）も母親（妻）が主体となっている。（財）こども未来財団の「平成15年度子育てに関する意識調査」（2004年12月）⁴⁾によれば、子育て中の父母は、子育ての役割分担として、妻が6割、夫が4割を理想とする人が最も多い。しかし、実態は妻が8割、夫が2割という認識が最も多い。

また、国際的にも父親の育児参加についての問題提議がさかんにになり、家庭教育に関する国際比較調査などが頻繁に行われるようになり、わが国の父親が子どもと過ごす時間の低さが問題になってきた。

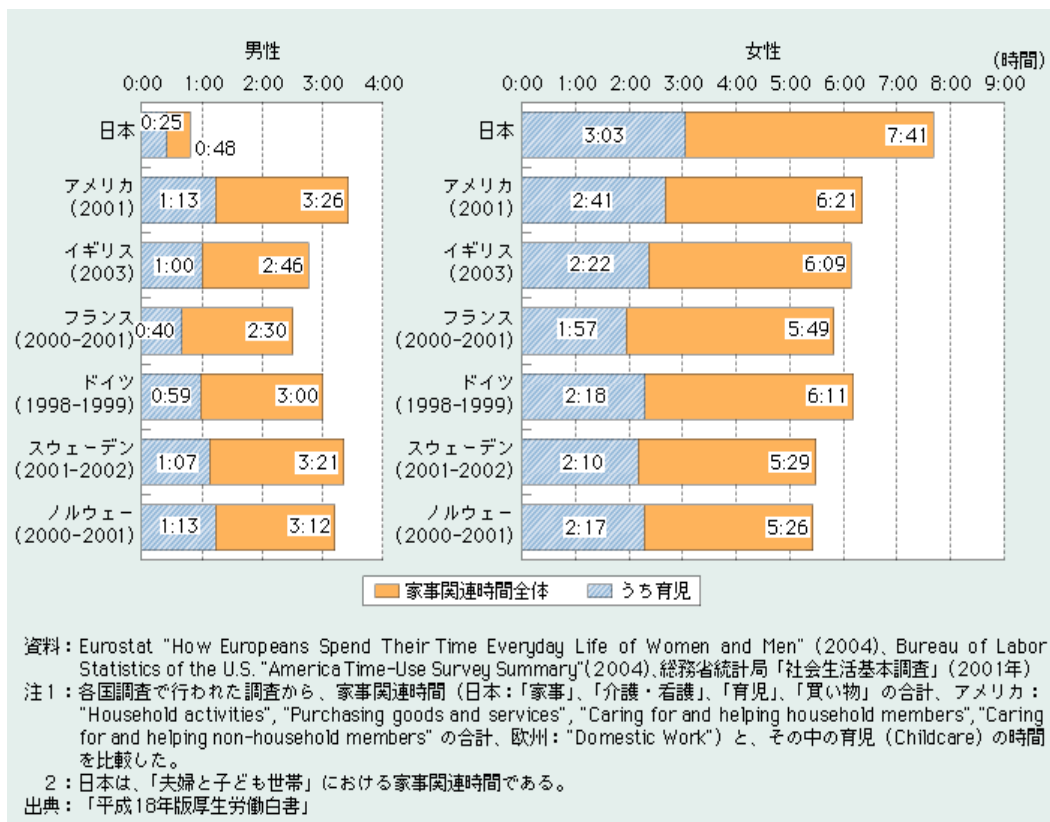
2. 5 平成18年版 少子化白書から 父親不在

これらを背景に、「平成18年版少子化白書」⁵⁾では男性の家事・育児時間が少ないことが大きく取り上げられた。先の「平成15年度子育てに関する意識調査」では、子育ての8割は母親で、父親が2割という数値があった。しかし、「平成18年版少子化白書」では、その数値は大きく下回った結果が発表された。

その内容は次のとおりである。

“わが国では、子どもがいる世帯の夫が家事や育児にける時間は、1日平均1時間にも満たない。アメリカやスウェーデン、ドイツでは3時間に達しており、他の先進国と比較して最低の水準にある。一方、女性の家事・育児時間は、他の先進国より長く、家事・育児の負担は女性に集中している状況にあるといえる。”

図1 各国の家事関連時間についての比較表を参照⁶⁾



出典 「平成18年版少子化白書」

2. 6 子ども・子育て応援プラン

この1日48分という1時間にも満たない時間が、わが国の父親の家事関連時間であり、そのうちの約半数が育児にかかわる時間という国際的にも例を見ない数値の結果を、重く見て、国は、政府の少子化対策として、取り組ん

できたエンゼルプランや新エンゼルプランの次に策定された「子ども・子育て応援プラン」⁷⁾において、働き方の見直しを重要課題に置いた。

国は、2003年に、少子化対策を抜本的に取り組むとして少子化社会対策基本法⁸⁾、次世代育成支援対策推進法⁹⁾を成立させたあと、政府レベルとして、全閣僚が参加し、首相を会長と少子化対策会議を発足させ、2004(平成16)年、国の基本施策として少子化社会対策大綱¹⁰⁾を決定し、その重点施策の具体的実施計画として「子ども・子育て応援プラン」を策定した。

そこでは、少子化社会対策大綱にそって、働き方の見直しのなかで、仕事と家庭の両立支援と働き方の見直しとして企業の行動計画の策定や実施の支援、個人生活等に配慮した労働時間の設定改善に向けた労使の自主的取り組みの推進などが盛り込まれている。

とくに育児休業取得率男性10%、女性80%の目標数値を掲げ、男性も家庭でしっかり子どもに向きあう時間が持てるようにし、育児期の男性の育児等の時間が他の先進国並みになるようにしていくよう提案されたのである。

この「子ども・子育て応援プラン」の策定により、時すでに遅しの感はあるが、社会的にわが国の父親の育児参加が極めて少ないという実態が認知され、父親たちの認識も以前に比較すると、子育てに参加したいと願う人や子育てに意欲を持つ人が増加した。

2. 7 ある母親の意識

では、次に家庭における父親不在は、家族にどのような影響を与えてきたのかを探っていくことにする。母親たちは、父親を家族のリーダーとして、また子育てのパートナーとして、頼りにしていた。父親が休日に家庭にいれば、家事なども分担し、赤ちゃんのおむつを交換したり、一緒に子どもと遊ぶなど育児にも積極的にかかわってほしいと望んでいた。そのような家事や育児の分担をとおして、子どもの成長を共に喜んだり、共に気になることを語り合ったりして、夫婦間の絆を強めていけるような家庭経営が理想であった。

そして、その父親と母親のよきパートナーシップが子どもの成長にも良好な影響をもたらし、子どもの情緒の安定が図られ、この家庭に生まれてきてよかった、自分がここにいていいのだという自己肯定感をもって育つことができるという家庭養育の基本も語られるようになった。

しかし、現実はなかなか厳しく、父親がほとんど家庭で時間を過ごすことがなく、ましてや、家事や育児に時間を割くことができない男性が多いのが実情である。

筆者が担当したある市民講座で、参加者の3歳の子どもの母親であるAさんから、次のような話を聞いた。Aさんの夫はとにかく仕事が厳しく、平日は出勤時間が早く、子どもが寝ている間に出勤。夜も帰宅時間が遅い。休日もほとんど出勤で、1か月に1度休みがとれるときなどは幸運で、とくに最近の2、3か月の間、ゆっくり休める日は1日もなかった。妻として仕事が大変なのはよくわかっているが、あまりにも家庭生活を犠牲にした仕事ぶりに我慢できなくなり、思い余って、夫に「仕事も大事だけれど、家のこと、子どものこと考えてほしい」と訴えた。そのとき、夫はAさんに「君にはわかってもらっていると思っていた」とつらそうに言ったそうである。

そのあとで、Aさんは、後悔したという。なにもAさんの夫は好んで今のような生活を送っているわけではない。厳しい職場環境がこのような生活を余儀なくさせている。

夫だって家族のこと、家庭のことをおろそかに思っているわけではない。むしろ逆で、家族のことを大事に思い、少しでも時間がとれれば、息子に関わり、息子の相手をしている。そのように夫のことを理解したAさんは夫に、後日自分が言い過ぎたと謝罪したそうである。夫もAさんの気持ちを理解し、自分の働き方を見直し、家族と共に過ごす時間の大切さを認識したそうである。

その後、夫は会社にも、ときには遠慮しないで休みを要求し、家族そろって休日を楽しんだり、ときにはAさんの愚痴や悩みを聞いてくれる時間を大切にしてくれるようになったとのことであった。Aさんの切羽つまった思いが夫に通じ、その家庭生活が少しでも改善されたことを、Aさんと共に喜びあったが、父親が家庭においての家事や育児の分担に時間をかける余裕のない現状をたたくつけられた思いを拭い去ることはできなかった。

2. 8 「母性神話」と「3歳児神話」がもたらすもの

前項の事例が示すように、母親たちは、自分の理想とする家庭生活とはほど遠いなかでも父親の仕事中心の生活にも理解を示し、父親の不在を乗り越え、家庭を必死になって守ろうとする。

その背景にわが国では、育児は母親でなければならないという「母性神話」や3歳児までは母親の手で育てなくてはという「3歳児神話」が根強くあり、その結果、母親が全面的に子育てを担う役割を背負うことになる傾向があるといわれる。

この「母性神話」や「3歳児神話」により、女性は母親になれば本能として子どもを育てる能力をもっており、その母性により、子育てができるものであるという風潮を社会全体が持つようになったことも事実である。確かに妊娠、出産に続き、赤ちゃんに母乳を飲ませるなどの行為は男性には絶対できない行為であり、母親の存在が赤ちゃんにはかけがえのないものとして神聖化され、母性神話などのことばが生まれたことは否定するものではない。

しかし、これらのことばのとおり、母親は、「母性豊かな母親であらねばならない」という意識を持ちすぎ、子育てをすべて母親一人で抱え込んでしまう。そのため、子育てがうまくいかない、自分の子育てに自信がない、相談したいが夫は仕事で疲れ、家での会話もおろそかになっている。このような状況が長く続くと、母親は子育てで不安や負担感が増し、次第に孤立していく傾向になる。周囲に友人や相談できる人がいたり、気楽に子ども連れで集える場に積極的に参加できる人は、家庭で父親からの協力が得られないもどかしさも仲間同士で共有しながら、子育てを続けていくことができる。

しかし、転勤してきた直後や母親が人とコミュニケーションが取りにくいタイプであり、地域や隣り近所の付き合いも少ないなどであれば、子育ての孤立は深刻な状況になっていく。母親と子どもだけでの24時間の生活を過ごす姿を象徴し「母子カプセル」ということばも生まれた。このことばが示すように、1日中子どもから目が離せない母親のなかには、子どもがいうことをきかないから体罰を加える、よその子はきちんとできるのでにわが子はできないので、しつけのつもりでやったなど児童虐待につながるケースを生む場合もあり、それが後を絶たない状況である。

2. 9 母親の役割と父親の役割

父親が仕事のためとはいえ、家庭を顧みず、仕事最優先で、家庭生活をおろそかにし、子育てはすべて母親任せというのは、家庭経営の面からも子どもの成長の面からも重要な問題である。

家庭においては、本来父親が果たすべき役割と母親が果たすべき役割がある。その両方の役割が十分果たされ、父親と母親がよき家庭経営のよきパートナーとなり、家事や子育てを分担する。父親と母親が協力しながら、家庭生活を送り、子どもにも関わっていく。この光景のなかで、子どもが育っていく。"子どもは親の背中をみて育つ"とよくいわれるが、まさにそのとおりである。今、必要なのは、父親の背中である。子どもに見える背中がほしい。

だからといって戦前の独善的な権威を持って君臨する家父長制度のような父親像の復活を願っているわけではない。健全な権威を備えた父親の存在がほしいのである。その父親は家族の総責任者として母親と協力して、家族を統率する。時間が縛られていても、母親のよき相談者となり、家庭のこと、子どものことをよく理解してくれる。そして、家族の心配ごとなどの解決に向けて、労を惜まず、立ち向かう。また、時間のあるときは、子どもに男性でなければできないような身体を使った活動的な遊びをしてくれる。そんな父親がほしいのである。

家庭における父親、母親の役割を語るとき、ユングの父性原理と母性原理が提唱されることが多い。1998年（平成10年）版厚生白書にユング¹¹⁾の説が掲載された。それによると、「父性原理とは「切る」原理をいい、厳しさ・規律・鍛練などを意味し、母性原理とは「包む」原理をいい、優しさ・受容・保護などを意味する。子どもの人間形成にはおいては、母性的な優しい受容・保護とともに、父性的な厳しい規律・鍛練が必要であるが、現代の家族においては父親不在や父親の権威喪失のため父性原理が欠如し、そのため子どもの人間形成が歪んだかたちになっているという論者が多い」。

また、同じく1998年版厚生白書¹²⁾は次のように述べている。この文章は筆者がとくに本論文で述べたかったことと同じ主旨であるので、ここに引用する。

"子どもが健全に成長するための親の子育て態度として、子どもをあるがまま肯定し、受容する優しさ（包容性）

と子どもに理念や社会の規則を教える厳しさ(規範性)という態度が必要である。この優しさは「母性原理」と、厳しさは「父性原理」と呼ばれることもあるが、父親も母親も両方の原理を持ち得る。近時、子育てにおける父親不在という現実の中で、父親・母親両方が子育てに関わる場合に比べ、ともすれば、「父性原理」が欠如しがちであることが子どもの成長に悪影響を及ぼしているとの指摘がなされ、子育てにおける父親の役割の重要性が叫ばれている。こうした中で、家庭において、父親がまず子育て自体に積極的にに関わり、夫婦が共に子育てを担う中で、親として求められる優しさと厳しさという二つの態度をもって十分子どもと接することが求められる。"

2. 10 父親の育児参加

以上みてきたとおり、父親の姿はさまざまな局面を呈し、現在に至っている。家族のなかで父親不在といわれたり、仕事人間と呼ばれたり、父親の役割を放棄しているのではないかとわが国では父親のイメージダウンが激しい。しかし、この姿は前述のとおり、決して父親自身が望んだものではない。過労死やリストラと戦いながら、家族を守っていかねばならない現実が目の前にある。父親にもっとゆとりをもってほしい。父親にもっと家庭生活や子育てを十分楽しんでもらいたい。そんな願いをこめて2007年内閣府が提唱した仕事と生活の調和を呼びかける「ライフ・ワーク・バランス」憲章¹³⁾が今少しずつ、広がりつつある。父親よ。もう少し、自分の仕事ぶりを振り返ってみよう。もう少し、効率のいい働き方ができないだろうか。家族との時間を捻出できないだろうか。家事をし、育児を分担する。そこから子どもの成長が見られるのである。育児休業もとってほしい。それが、母親の子育てにゆとりと安心を与える。

父親と母親の間でできた生命="子ども"を育てることほど世の中に興味深く、神秘的で感動的な行為はない。その意識を持ちはじめた父親が増えてきている。そんな父親に対して多くの自治体では、ポスターや冊子による「育児参加」の啓発をはじめ、最近ではこれから父親になる男性に向けて「父子手帳」や「父親ハンドブック」を配布するところや、母子保健サービスにおいて父親教室や父親講座などの取り組みが行われるようになってきた。また、父親同士が気軽に参加できるグループ活動もさかんになってきた。なかでも、通称「おやじの会」が全国レベルで広がっている。これは、男性の意識改革を図り、子育てに積極的に参加し、地域に貢献するというコンセプトがある。今後子育てのネットワークづくりの一つのモデルとして期待ができる。

平安時代の終わりごろにつくられた『梁塵秘抄』¹⁴⁾という歌謡集に出てくる「遊びをせんとや生れけむ 戯れせんとや生れけん 遊ぶ子どもの声をきけば、我が身さえこそ動がるれ」という巻第二の歌を父親も母親も共に味わってほしいと願う。

子どもたちが楽しく遊んでいるその元気な声を聞けば、感動のためにわたしの身体までも動いてしまう。そんな心境になる権利は父親にも母親にもある。

3. 絵本からみた父親像

3. 1 『いやだいやだのスピッキー』

はじめに紹介する絵本はウィリアム・スタイグの作品である。



「いやだいやだのスピッキー」ウィリアム・スタイグ作・絵
小川 悦子訳 セーラー出版 2002年

絵本紹介：『いやだいやだのスピッキー』

■ 書誌情報

絵本の題名 : いやだいやだのスピッキー
絵本作家 : ウィリアム・スタイグ
絵 : 同上
訳 : 小川 悦子
出版社 : セーラー出版
出版年 : 初版2002年7月31日発行
印刷／製本 : 大日本印刷
サイズ・ページ数 : 26×20cm 32P

◇ 本の内容あれこれ

(1) お話づくりの天才であるウィリアム・スタイグの作品

この絵本は、とくに親と子どもの絆を描いた作品とは言えない。しかし、絵本全体から、スピッキー一家の一部始終が見え、家族のなかで果たす父親の姿が浮き彫りになっている。本書は前回の紀要で取り上げた親と子どもの絆を書かせたら、右に出るものがないといわれるお話づくりの天才であるウィリアム・スタイグの作品であり、読む者に何ともいえない幸福観をもたらしてくれる絵本に仕上がっている。

あらすじは末っ子のスピッキーがきょうだい関係や親との関係が自分の思う通りにいかず、いらいらし、すべてに「いやだ、いやだ」と反抗し続け、それが高じて、ひっこみがかからない状況になっていく。スピッキーの表情や身体つきがおもしろいこと。目をつりあげ、いかり肩で風を切り、前のめり大股で歩く。すねて、すねてすねまくる。

家族の一人一人は、今までのスピッキーへの接し方を反省し、スピッキーの機嫌が直るようと、優しいことばをかける。父親ははじめ、そんなスピッキーを傍観し、父親らしい客観的な口調で「ほっておきなさい。わけもなくスネてるんだから。あたまを冷やしたほうがいい」と言う。まわりのスピッキーへの接し方にあきれながら。しかし、スピッキーのすね方は尋常ではなかった。家族の優しいことばがけにも友達の誘いも一番効き目があるはずであった祖母の優しさもすべて受け入れず、庭につるしたハンモッグのなかで、くたびれた洗濯ものようにふて寝をし続けるのである。こうなったら、てこでも動かないという状況である。

父親はスピッキーが大好きなサーカスの一座が家の前を通るのを見て、いいことを考えつく。スピッキーが機嫌を直すためにとっておきの方法は、サーカスのなかでスピッキーが一番好きなピエロを家に呼ぶことだった。

ピエロは「スピッキー大好き」と書いた紙を持ち、手品で三色アイスクリームを出す。スピッキーは思わず笑い出す。家族のみんなが見守るなかで、少しずつ心がほぐれていく。

雨が降り出し、庭のハンモッグのなかにいるスピッキーはぬれねずみ。母親がシートをかけ、父親がピーチパラソルを立ててくれる。そのころになると、スピッキーの気持ちはすっかりおさまってきた。しかし、これだけすねたあとどうやって仲直りをしたらいいのかその方法がなかなか思い浮かばない。謝るのはどうしてもいやだった。いろいろ考えたあげく、飛びきりいい方法を考えつく。

さあ、翌日の朝、ダイニングルームに集まった家族の目にはすばらしい光景が目に入る。テーブルの上には、山のようなごちそうが並び、スピッキー扮するピエロがお出迎えなのだ。家族は笑いに包まれる。この場面にたどりつくまでの長かったこと。家族もスピッキーも内心うんざりであった。とくに家族はお手上げ状態で、少しずつ、スピッキーのわがままな姿が許せなくなってきていた。しかし、最後はスピッキーの名案が家族みんなを幸せにしてくれるというストーリーである。

子どもなら、ときに末っ子なら、スピッキーの気持ちはよくわかるだろう。父親、母親が読んでも、スピッキーの両親の気持ちは理解できるだろう。

(2) 母親、父親の役割

今回のテーマである「絵本における父親像」を表す作品のひとつとしてこの絵本をに選んだ理由は家族のなかで果たされなければならない父親の役割をこの絵本のなかで感じ取ったからである。

子どもが成長する過程で、2歳前後に第1次反抗期が訪れる。この時期、子どもは何かにつけて、覚え始めの「いや」という言葉を連発し、だだをこねたり、ぐずったりする。

「いや」、「だめ」、「じぶんで」の3つの言葉はこの年齢の使う代表的な言葉である。しかし、一方で親のそばにいたい、親に愛されたい気持ちが強い。自分の思いどおりにならない欲求不満と甘えたい気持ちが交差し、最後は親に抱っこされて、泣きやむ。この頃の子どもと親のかかわりには何といても母親との愛着関係が重要である。子ども自身の基地は母親から大切にされている、愛されているという安心感からつくられていく。

では、第2次反抗期のころはどうだろう。小学校高学年になる、11歳、12歳頃から中学生の初期に現れやすくとされている第2次反抗期では、母親が子どもへ愛情を注いでいるから大丈夫というわけには行かない。ここで重要なのは、父親の存在である。乳児期から幼児、学童期において、父親がどのように家庭のなかで、子育てに関わり、父親の役割を果たしてきたかが問われるのである。

前章の2.5のところでも述べたが、子どもが健全に成長するのは、親の子育て態度が大きく影響する。とくにわが国の子育てについては「父親不在」といわれることが多いが、父親が父性としての役割を十分果たし、子どもにとってよきモデルとなり得るよう家庭生活を送り、父親自身が子育てに積極的に関わる必要がある。

父親は、家族を統合し、そのリーダーとして家族の文化を積み上げ、社会とのつながりを子どもに教えていく役割をもつ。その結果、子どもは判断の基準、行動の原理を把握していく。

母親は子どもをあるがままに肯定し、受容する優しさで子どもに接し、父親には、理念や社会の規則を教える厳しさが求められるといわれている。第2次反抗期を向かえた子どもたちが、家庭内や彼らの行動半径のなかでさまざまなトラブルに出会うとき、父親から示された数々の家庭内でのしつけ、マナー、礼儀作法、責任感、公共心や社会的規範などを思い出し、自分をセーブしたり、相手を思いやったりし、大きな事故や事件に発展しないことが望まれる。

(3) スピンキーの場合

スピンキーも第2次反抗期の入り口にさしかかった年齢になっている。なにかにつけてイライラし、おもしろくない。きょうだいのなかでもいつもないがしろにされ、自分の意見を主張しても取り上げてもらえない。母親はいつも「愛している」と言っているが、少しそらぞらしく感じてしまう。父親はというとスピンキーがこんなにいるのに、いつものように仕事に出かけてしまう。もうこうなったらとことんすねてやる。そんな気持ちになったスピンキー。家族のことがいやになり、自分だけの世界で過ごしたい。そう願うスピンキーだが、家族から離れ、自分だけ特別のことができるわけがない。できたのは、庭のハンモックに寝転ぶだけ。そのうち家族はスピンキーの大好きなサーカスを見たり、自分たちの好きなことを楽しんでいる。そして、スピンキーはやはり家族のもとへ帰りたくなる自分を発見する。『そうだよ。やはり、僕はみんなのことが好きだ。父親も母親もきょうだいのみんな』そう感じてもなかなか素直になれないスピンキー。

スピンキーの突然の反抗に、父親は少し戸惑いながらも息子の成長を見守り続ける。その見守りの姿勢のなかに、父親としての寛大さや客観性、判断力や責任感が見られる。

子どもの反抗に対して、どう処理するのが望ましいのか、それを探る父親の姿に感動する。サーカスのピエロを使うことで、スピンキーの気持ちを慰めようとする父親。これも子どもが何に興味をもっているかをよく知り、父親として判断した結果である。

この絵本のなかの父親は、十分に父親の役割を果たしている。父親が存在感をもって家族とともに過ごす日常を描いたこの作品のなかに筆者が求める父親像を読み取った次第である。最後のページ。父親の膝に抱かれたスピンキー。彼もやはり父親を尊敬している様子がうかがえるのである。

3. 2 『はちうえはぼくにまかせて』

絵本紹介：『はちうえはぼくにまかせて』

■ 書誌情報

絵本の題名 : はちうえはぼくにまかせて
絵本作家 : ジーン・ジオン
絵 : マーガレット・ブロイ・グレアム
訳 : 森 比左志
出版社 : 株式会社 ペンギン社
出版年 : 初版1981年8月
印刷・製本 : 厚徳社
サイズ・ページ数 : 27.6×20.1cm 36P



「はちうえはぼくにまかせて」 ジーン・ジオン作・
マーガレット・ブロイ・グレアム絵 森 比左志訳 ペンギン社 1981年

◇ 本の内容あれこれ

夏休みに父親の仕事が忙しく、どこにも行けないトミーが自分で決めたのは、るすになる近所の鉢植えを預かり、世話をする仕事だった。それも植え木1個分につき、1日2セントという条件つきである。

作者はアメリカの楽しい絵本の代表作である「どろんこハリー」をはじめとするハリーシリーズを世に出したジーン・ジオン、絵はジーン・ジオンの妻である、マーガレット・ブロイ・グレアムによる作品である。絵本は、黄色、水色、緑色の水彩と軽妙な線描で描かれており、どのページにも鉢植えがふんだんに並び、内容にぴったりのさわやかさがあふれている。

とにかく、トミーが考え出す発想は、ユニークである。日本の読者としては、アメリカのお国柄、職業観、生活観をうらやましく感じてしまう。トミーは思いつきだけで鉢植えの世話をしているのではない。父親が夏休みをとれないからといって、そのことを残念がったり、ひがんだりしていない。自分の特技を生かし、その間楽しく自己実現していくのである。すばやい行動力にも脱帽である。

家中が鉢植えにうずまり、父親はそれが気にいらぬ。父親の腹立たしさをそっと見守る母親。食事するときも入浴するときもトミーの家はまるでジャングルのように緑に囲まれていく。とくにおもしろいのが、父親がさまざまの鉢植えに囲まれたダイニングルームで怒った顔で朝食を食べるページ。トミーはまるで森にピクニックに出かけた気分が無邪気楽しく食卓に向かい、母親はレンジで料理する。そのレンジの付近もたくさんの鉢植えが所狭しと並んでいる。父親の表情がなんとも言えず読むものの笑いを誘う。

そして、お話しが急ピッチで展開する。ある夜トミーは預かった鉢植えがどんどん大きく育ち過ぎ、トミーの家中を覆い、家を壊してしまう夢を見る。あわてたトミーは、図書館で植物の伐採の方法や、植物の増やし方を調べ、

園芸店で植え木ばさみなどを購入する。そして、家中の鉢植えをていねいに刈り込んでいく。刈り込んだ枝を小さな鉢に植え替える。こうして、預かった鉢植えはもとの状態よりすてきになる。夏休みが終わる頃、近所の人たちが帰ってきて、トミーにお金を払い、鉢植えを受け取っていく。

「前よりすてきになっている。鉢植えがとても元氣だ。」と喜びながら。小さな鉢に植えた植物も子どもたちにプレゼントする。

これで家のなかがすっきりし、父親も喜び、めでたし、めでたしだろうと想像するが、なんと思いがけない結末が用意されていた。父親は思いがけない言葉を発する。

「パパはあの鉢植えがなつかしいよ。ほら、いなかにいるようだったじゃないか。」「パパはやっといそがしくなくなったんだ。うちはこれからが夏休みっていうのはどうだい?」

この言葉を聞いたときのトミーのうれしそうなお表情。母親も笑顔でお茶を運んでくる。犬もねこもうれしそうである。家中が喜びにあふれている。父親はトミーが一生懸命鉢植えの世話をする姿に父親として、わが子の成長ぶりを見ていたのである。

楽しいストーリーのなかに、アメリカでの家庭生活がさりげなく描かれ、そのなかで、父親と子どもの関係が好ましい。父親はトミーの行動が不満であるが、子どもの自立していく姿に感動し、エールも送る。その父親の姿を筆者は本論のテーマである絵本のなかの父親像としてとらえた。自分の思いとは異なるわが子の発想を受け止め、そのうちに子どもの行動を頼もしく感じる。その思いのなかに、父親自身も父親として成長していく過程も読み手には伝わってくる。

原作は「The Prant Sitter」 植物のお世話役というところだが、翻訳の『はちうえはぼくにまかせて』は素晴らしい訳である。

3. 3

絵本紹介：『もりのなか』

■ 書誌情報

絵本の題名	: もりのなか
絵本作家	: マリー・ホール・エッツ
絵	: 同上
訳	: まさき るりこ
出版社	: 福音館書店
出版年	: 初版1963年12月20日発行
印刷/製本	: 小宮山印刷/東京美術紙工製本
サイズ・ページ数	: 26×26cm 32P



「もりのなか」 マリー・ホール・エッツ作・絵 まさきるりこ訳
福音館書店 1963年

◇ 本の内容あれこれ

(1) マリー・ホール・エッツについて

マリー・ホール・エッツは前回の紀要にも紹介した女流絵本作家である。繊細な心の持ち主で、彼女のもうひとつの代表作である『わたしとあそんで』では、ナイーブで静かな性格の持ち主である主人公が森のなかの小動物とふれあい、心を通わせていくというストーリーである。その主人公はマリー・ホール・エッツ自身であるといわれている。その静かで心優しい作家によって、生み出されたこの『もりのなか』は、独特の魅力にあふれた作品である。

ストーリーは単純で、わかりやすい。ある男の子が森のなかに出かけていく。その森では、出会った動物たちが男の子を先頭に行列になって、ついてくる。先に紹介した『わたしとあそんで』もいろいろな小動物が登場してくるが、『もりのなか』では、出会った動物が主人公の仲間になってついてくるという楽しい作品になっている。

ぼくは新しいラッパと紙の帽子を持って

森へ散歩にでかけた。

大きな野生のライオンがうたた寝していた。

ところがぼくがラッパを吹いたら彼は起きあがった。

「どこへ行くんだい？」と彼はぼくに言った。

「たて髪をとかしたら、ぼくもいっしょに行っていきたい？」

そして彼はたて髪をとかして、ついてきた・・・

らいおん、ぞう、くま、カンガルーの親子、こうのとりの、さる、うさぎが登場し、男の子の行列についてくる。そして、みんなで「はんかちおとし」や「ろんどんばし おちた」を楽しむ。

この単純なストーリーをマリー・ホール・エッツは全ページをモノクロで描いた。ひとつひとつの絵が簡素で具象主義的である。子どもの絵本という多くの人が色鮮やかなに彩色されたものを思い浮かべるだろう。しかし、白と黒で描かれたこの絵本は多くの子どもと大人に支持された。あえて、白と黒に統一された作品に森の中の神秘さや不思議な気配がただよってくる。

(2) ドロシー・バトラーの絵本論から

「クシュラの奇跡」を書いたドロシー・バトラー^{*1)}は著わした『あかちゃんの本箱 0歳から5歳の絵本』¹⁵⁾のなかで、『もりのなか』を取り上げ、とくに白黒で描かれたことについて、次のように述べている。

"物語にはまず多くのことが要求されます。テーマは適当か、筋はよく練られているか、共感できて生き生きした登場人物であるか—よくできている物語はクライマックスへと自然に話が進み、言葉ではとらえられなくともすぐに理解できる性格を備えています。

たしかに本に親しみ始めた5歳児や6歳の子どもは、まじめで落ち着いた白黒の絵より明るい赤や青の本にひきつけられます。これはどんな分野でも、洗練されていない趣味の持ち主が、繊細さより衝動的なものの方に喜びを感じ、これを求めるのだということを立証しているにすぎません。(いうなればセンダック^{*2)}よりディズニー^{*3)}をとというようなものです。) 経験がひろがり、趣味が洗練されれば、輪郭のはっきりした絵の好みは、他の要因によって押さえられます。線や形の微妙さや関連性への感覚は無意識のうちに最上の絵本へと子どもを導きます。"

これは、生まれつき重い障害をもった自分の孫が絵本と出会い、障害を乗り越え、成長していく過程を論じたドロシー・バトラーの絵本論として大変重みのあることばであり、趣味が洗練されていけば、輪郭のはっきりした絵ではなく、最上の絵本を子ども自ら求めるようになると明言する。

そして、その最上の絵本に出会わせたいという願いをこめ、白黒で描かれた『もりのなか』を推薦しているのである。

ドロシー・バトラーが最上の絵本として紹介した『もりのなか』では、モノクロで描かれた動物たちの表情やしぐさがひととき美しく感じられる。画家マリー・ホール・エッツは、森のなかで生き生きと暮らす動物たちにそっと息を吹きかけた。そして、行列のリーダーである男の子は有頂天で動物たちと遊びこむ。この楽しい遊びは永遠

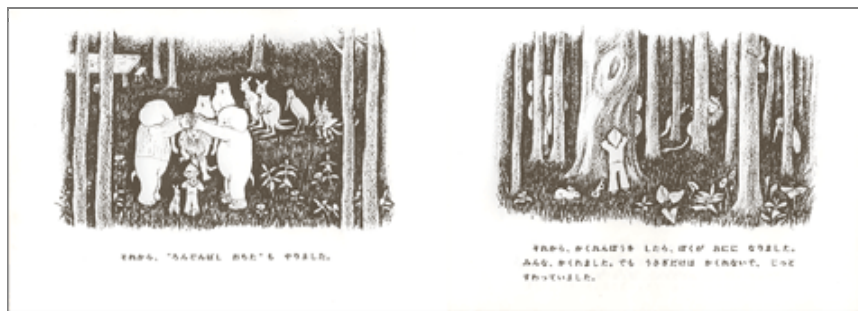
に続くかと思われた。しかし、かくれんぼをしていると、動物たちは一匹もいなくなり、かわりにぼくのおとうさんがやってくる。

（3）父親の一言

この絵本のクライマックスはこの父親の登場である。父親は遅いからもう帰らなくてはと告げる。普通ならここで物語は終わるのだが、父親は動物と遊んでいたという息子の空想の世界を理解し、思いがけず最後にこんなことを息子にいうのである。

「きっと、またこんどまで、待っててくれるよ」息子はこの言葉に大満足。父親の肩車にのって「さよなら。みんな待っててね。また今度散歩にきたときさがすからね！」という。子どもの心のなかで起こっていることを見抜き、子どもの成長を後押しする父親がここにいた。子どもの内面の理解し、その成長に期待をかける父親の姿が素晴らしい。

ここに筆者は理想とする父親像をみた。



※1）ドロシー・バトラー

1925年、ニュージーランド・オークランド市に生まれる。児童文学者。幼児期から生涯にわたる読書教育をライフワークとしている。彼女の孫クシュラが染色体異常のため、身体的に大きなハンディキャップを持って生れ、140冊の絵本と出会い、障害を乗り越えて成長していく過程を「クシュラの奇跡」で著わした。

※2）モーリス・センダック(1928～)

絵本作家、1964年「かいじゅうたちのいるところ」でコルデコット賞受賞

センダックの代表作

かいじゅうたちのいるところ 富山房 1975年

まよなかのだいどころ 富山房 1982年

まどのそとのそのまたむこう 福音館書店 1983年

※3）ディズニー

ウォルト・ディズニー社によるアニメ映画が有名。カラーアニメなどをヒントに絵本も製作。「白雪姫」「ピノキオ」「バンビ」「ピーターパン」「わんわん物語」など。

3. 4 『とうちゃんのトンネル』

絵本紹介：『とうちゃんのトンネル』

■ 書誌情報

絵本の題名 : とうちゃんのトンネル

絵本作家 : 原田 泰治

絵 : 同上
出版社 : ポプラ社
出版年 : 初版1980年4月発行
印刷／製本 : 瞬報社写真印刷株式会社／株式会社ハッコー製本
サイズ・ページ数 : 31×22cm 36P

◇ 本の内容あれこれ

(1) 原田泰治について

次に紹介するのは、原田泰治作・絵の絵本「とうちゃんのトンネル」である。いままで、翻訳本から父親像に触れてきた。わが国の絵本では、父親を扱った絵本が少ない傾向にあると思われるが、この絵本は本論文にふさわしい父親の姿がふんだんに、しかも、奥ゆかしく描かれている。そして、わが国には、これほどまでに偉大な父親がいたのかと感心させられる絵本である。

原田泰治といえば、朝日新聞の日曜版に彼が描いた日本全国の古里の景色が毎週掲載され、印象に残っている人も多いはずである。1982年のことである。その風景は農村もあれば、海のみえる風景であったり、お寺や学校、段々畑もあった。その風景のなかに暮らす人々はいつもあたたかい眼をしていた。

原田泰治は1歳のとき小児麻痺を患い、両足が不自由であった。その足で全国47都道府県をまわり、日本の古里を描き続けた。彼の作風は、なにか心温かく、見る者に日本の原風景を感じさせてくれるなつかしき、穏やかさがあふれている。その彼が絵本を作る。これは極めて自然なことだと思う。彼の描く作品は子どもが見てもよくわかり、子どもからも愛される作風であるから。

この「とうちゃんのトンネル」は彼の画家としての集大成として描かれている。お話も絵も彼は全魂を入れ、この作品を作ったのだと推測できる。絵本のあとがきに書かれた彼の文章がそれを物語っているのである。"この「とうちゃんのトンネル」は、僕が幼いころ、体験したそのままの話です。僕の一家が伊賀良村（現在飯田市）へ引越し、村の人たちが考えもつかない高台へ田んぼをつくり、子どもたちに真っ白いごはんをたべさせようと、大自然に挑戦した父の姿をいつか絵本にしたいと思っていたのです。以下略"

(2) 父親の仕事

あらすじは、たいすけの一家が戦争で食べ物なくなり、町から村へ引越してくる。ところが、たいすけの一家6人が暮らすようになった高台は、水が出ないので米がつかれない。姉の好子が結婚することになった。伊賀良村では、嫁入りの朝に自分の家でとれた米を炊き、赤飯で祝う風習があった。たいすけの父親は、花嫁の門出をせめて自分の畑でとれた陸稲（おかぼ）での赤飯を作り、祝ってやりたいと考え、陸稲（おかぼ）づくりに取り組むことするのである。

米づくりはわが国をはじめ東南アジアでは多くが水田による水稲が主である。田んぼに水をはり、そこに田植えをする。その後、稲は水田のなかで、ぐんぐん成長し、秋になるとたわわな稲穂が垂れ下がり、おいしい米となるのである。それにひきかえ、陸稲（おかぼ）は畑で作るから、発芽時、成長期と水やりが欠かせない。それもたいすけの家の畑は高台にあるため、下の小川から水をくみ、朝はやくから暗くなるまで、陸稲（おかぼ）に水まきをしなくてはならない。この苦労は尋常なものではなかった。父親は家族の先頭に立って、働き続ける。

さらに、その年は日照りが続き、一家総出の水やりも、効果なく、陸稲（おかぼ）はほんの少ししかとれなかった。そのときの切ない父親の思い。たいすけは幼いながら、父親の無念の涙の意味を忘れなかった。

姉が嫁いで行ってから、父親は「水」のことばかり考えるようになった。父親は高台の畑に向けて、トンネルを掘りたいと願うようになった。村一番の物知りの人に相談をするが、「水」が出るようなところではないといわれる。しかし、父親は決心する。家族みんなで「水神」をお願いし、父親は横穴を掘ることとなった。その場面の絵はすばらしい。足の悪いたいすけが一本の杖で立ち、懸命に水が出るように祈っている。家族みんなの願いがそのページにはあふれ、その思いを水神様に伝えるような白い鳥が3羽、冷たい北風のなかを飛んで行く。

それからの父親は毎日、毎日水を求めて、トンネル掘り続ける。つるはし一本で少しずつ、少しずつ掘り進んでいく。ある日、トンネルのなかで、父親は腕をかかえて考えこんでしまう。心配になったたいすけはトンネルに

入り、父親にわけを聞く。父親は大きな石にぶちあたり、もうこれ以上掘れなくなったとたいすけにいうのである。驚いたたいすけは、父親を慰めようと、父親が作ってくれた木琴で学校でならった「山の音楽家」の曲を父親に聞かせた。「こぎつねコンコン 山のなか・・・」

読者にも耳を澄ますと、長いトンネルのなかで、木琴のやさしい音色が聞こえてくるようだ。父親が、腕を組み、たいすけの弾く音色に聴き入る姿はこうごうしい。

たいすけの優しさが父親に勇気をもたらした。父親は大きな石の下を掘り進むことにした。何日も何日もかかって石の壁をのりこえることができた。トンネル掘りをはじめてから、二度目の春を迎えたある日、ついに水が出たのである。村中の人々が応援してくれた。

たいすけの家に水が通り、念願の高台に田んぼができあがる。父親がトンネル掘りをはじめてから4年目、とうとう田んぼで田植えをする。家族中の喜びはいかばかりであっただろう。村の人々も喜び、一緒に田植えを手伝ってくれる。

娘の嫁入りの朝に赤飯を食べさせることができなくて、悔しかった父親が一人で、水を掘りあて、無理といわれた高台に田んぼをつくることに成功した。この田んぼはいまでも秋になると黄色のじゅうたんを敷いたように稲が実る。人々はいつの間にかこの田んぼを「たけさの田んぼ」と呼ぶようになった。

（3）たいすけと父親

この絵本は実話をもとに作られた。絵本に描かれた体験は原田泰治の原点であり、彼の数々の絵画をはじめとするさまざまな作品づくりはこの体験がベースになっているといっても過言ではないだろう。そのことが多くの人に感動を与えるのである。この絵本は、1980年に発行されたのち、2007年までに34回も版を重ねている。それほどまでに多くの読者を魅了して止まない。多くの子どもにも大人にも読んでほしい一冊である。

絵本には、彼の父親そのものが描かれている。家族のためにもくもくと働き続ける父親の姿。この姿を見ながら、たいすけは育っていく。どんなに苦しい逆境に出会っても、父親はくじけない。そんな姿を通して、たいすけも家族一人一人も父親を尊敬し、父親をモデルとし、自分たちも生きたいと願っていく。父親の意志決定に誤りはない。家族みんなが父親の意志を大切に、それに従っていく。それが家族を支える父親の役割なのである。

家族全員が父親の存在を誇りに思い、父親の手助けを進んで行く。少しでも父親のために役に立ちたいと願う家族たち。

父親は多くを子どもたちには語らない。しかし、父親の人格や性格が絵本のなかの行動や顔の表情にしっかり描き出されている。とくにたいすけにトンネルのなかで語ったことばは父親の人生そのものであり、印象深い。

"「このトンネルほりは、ちょうど人生のようなものだ。壁にぶつかったときでもどこかに抜け道がある。たいすけ、足が悪いからといってどんなことがあってもくじけてはいかん。」"

このことばこそ、父親が足の不自由な息子に送った金字塔のようなことばである。

たいすけと父親のつながり。これこそ今の時代にほしい親と子の絆であり、家庭における理想的な父親像であるといえる。



「どうちゃんのトンネル」 原田 泰治作・絵 ポプラ社 1980年

4. まとめ

絵本のなかの父親像を探るというテーマで父親と子どもをテーマにした絵本から検証してきた。どの絵本も父親はさりげなく、自然体で描かれていた。父親を扱うのだから特別に描いたという作品はなかった。絵本になかの父親は家族の一員として、日常生活を送り、父親の役割を気負わず、果たしていた。

そのことを本論文の結末として得たことは筆者にとって喜びである。わが国では、父親不在とか、父親の存在が薄くなったとかいわれる現状はある。しかし、国全体で子育て支援を充実していく方向のなかで、父親の育児参加を重要課題に据え、さまざまな取り組みもはじまっている。

絵本の世界において、見えた父親像は、私たちの日常生活のなかでこそ、輝くものであり、今後の家庭生活において、父親たちがさらに父親らしさに磨きをかけて子どもと母親に向かっていくことを願ってやまない。この論文に取り組み、父親たちの努力も理解できた。

子どもの最善の利益が叫ばれる今日、各家庭において、無理をせず、さりげなく、自然体で、父親と母親が協力し、子育てのよきパートナーとして、子どもに向きあうことこそ、今の時代に求められている家族の絆づくりであり、それが子どもの最善の利益につながるものだと確信する。

【引用文献】

- (1) 『大辞泉』 監修松村明編集委員 小学館 1995年
- (2) 落合恵美子 社会学者 『近代家族とフェミニズム』 勁草書房 1989年 『21世紀家族へ』 有斐閣 1994年 『近代家族の曲り角』 角川書店 2000年など
- (3) 『毎月勤労統計調査』 厚生労働省 1999年
- (4) 『(財) こども未来財団「平成15年度子育てに関する意識調査」』 2004年
- (5) 『少子化対策白書』 厚生労働省 2006年版
- (6) 『少子化対策白書』 厚生労働省 2006年版より各国の家事関連時間比較表
- (7) 『子ども・子育て応援プラン』 厚生労働省 2005年
- (8) 『少子化社会対策基本法』 厚生労働省 2003年
- (9) 『次世代育成支援対策推進法』 厚生労働省 2003年
- (10) 『少子化社会対策大綱』 厚生労働省 2004年
- (11) 『厚生白書』 厚生省 ユングの説 1998年版
- (12) 『厚生白書』 厚生省 1998年版
- (13) 『ライフ・ワーク・バランス』 憲章 内閣府 2007年
- (14) 『梁塵秘抄』 平安末期の歌謡集 後白河法皇撰 12世紀後半の成立
- (15) 『あかちゃんの本箱』 ドロシー・バトラー著 ブック・グローブ社 1989年

【絵本】

- 『ピッツアぼうや』 ウィリアム・スタイグ作・絵 木坂涼訳 セーラー出版 2000年
『ロバのシルベスターとまほうの小石』 ウィリアム・スタイグ作・絵 瀬田貞二訳 評論社 1975年
『いやだいやだのスピッキー』 ウィリアム・スタイグ作・絵 小川悦子訳 セーラー出版 1989年
『どろんこハリー』 ジーン・ジオン作 マーガレット・ブロイ・グレーム絵 わたなべしげお訳 福音館書店 1964年
『はちうえはぼくにまかせて』 ジーン・ジオン作 マーガレット・ブロイ・グレーム絵 森 比左志訳 ペンギン社 1981年
『もりのなか』 マリー・ホール・エッツ 作・絵 まさきりこ訳 福音館書店 1963年
『わたしとあそんで』 マリー・ホール・エッツ 作・絵 よだじゅんいち訳 福音館書店 1968年
『とうちゃんのトンネル』 原田 泰治作・絵 ポプラ社 1980年

【参考文献】

- 『子どもの社会力』門脇 厚司 岩波新書 2006年
『次代をはぐくむために』小長谷 有紀・加藤康子他 国立民族学博物館発行 2008年
『乳幼児の世界』野村 庄吾 岩波新書 1980年
『家庭教育ノート』文部省
『少子化対策白書』厚生労働省 2006年版
『子ども・子育て応援プラン』厚生労働省 2005年
『児童虐待』池田由子 中公新書 1987年
『父親力』正高 信男著 中公新書 2002年
『親子ストレス』汐見 稔幸著 平凡社新書 2000年
『クシュラの奇跡』ドロシー・バトラー著 のら社 1984年